



MEDICAL

医 療

婦人科検査と予防



個人差があるとはいえ、年齢を重ねれば重ねるほど、「なんとなく体の調子がおかしい」と思う機会が増えてくる。特に女性の場合、中年期以降に多い婦人病などの心配も出てくる。そこで、定期的な健康診断は非常に重要になる。ここでは婦人病を中心に、有効な検査と予防法を紹介したい。

婦人病の早期発見や予防などに有効とされる検査がある。アメリカのように乳がんの発生率が高いところでは、定期的に①マンモグラム（乳房レントゲン）を撮ることが勧められている。そして、子宮頸がんの早期発見につながる

②PAPsmear（パップスメア）検査は、20歳を過ぎたら年に一度は行いたい。さらに、多くの婦人病を誘因するとされる性病を明らかにする③性感染症の検査もここに加えるべきであろう。

マンモグラムはコストも良心的で、多くの保険でもカバーされる、という長所がある。一方では、少量とはいえ放射線による被爆があり、短期間に何度も検査を受けるとそれが乳がんの原因となるため、必ず

事前に医師に相談するように。現在はMRIも導入されている。被爆もなく、安全性は立証されているが、高額であり、いまだ検査での主流にはなっていない。

①マンモグラム （乳房レントゲン）

●マンモグラムによる定期的な検診
アメリカにおける、がん学会、外科学会、産婦人科学会、家庭医学学会、予防医学学会などの団体は定期的なマンモグラムを推奨している。それぞれの団体によって微妙に異なるが、基準として40歳から1～2年ごとのマンモグラムを勧めている。もちろん、患者の既往歴や家族歴などによって、それぞれに合ったスケジュールを勧める。特に50歳以下ではマンモグラムに加え、超音波による検診を行うこともある。

●日本人にも増加傾向の乳がん
アメリカ、イギリス、アイルランド、オーストラリアなどの先進国に比べて、日本は乳がんの発生率が比較的低い。その発生率が最近では増加の一途をたどっているのが現実である。1994年には胃がんを抜い

て、女性のがんの中で最も発生率が高いがんになっている。現在、年間約5万人が発病し、そのうち約1万人が死亡しており、2019年には年間の疾患数は約5万6000人程度になると推測されている。一生のうちで乳がんになる人の割合（生涯疾患率）は約4～5%であり、日本人女性の20人～25人に一人が乳がんになるという計算になる。ちなみに、アメリカでは女性の6人に一人が乳がんにかかるという統計があるが、1990年以降、乳がんによる死亡率は減少している。これは食生活を含めたライフスタイルの変化やマンモグラムの普及による定期健診によって、早期発見が大きく寄与していると言われている。一方、日本では、食生活の欧米化などの影響により、今後も乳がんの発生率が高くなると予想されている。

②PAPsmear （パップスメア）検査

PAPsmear（パップスメア）検査とは、顕微鏡で子宮頸部から採集した細胞の病変を調べる検査であり、子宮頸がんの80～85%を発見し、



INSUR-
ANCE



VISA



PENSION
PLAN



MEDICAL



JOB



EDUCA-
TION



LIVING



MONET



TRAVEL



LAW &
SAFETY



SAMPLE
LETTER

また、ガンになる前の病変も発見できる方法である。これは、1940年にパバニコローというギリシャの医師によって発明された方法であり、容易で安全、価格も安価、保険でのカバーも可能である。検査の流れは、膣鏡を用いて子宮頸部を視診し、小さいブラシで細胞を採集する。そのブラシを液体に入れてかき混ぜ、細胞を液体の中に落としてその細胞を特別な染色料を用いて染色し、検査をする。これに併せて、内診をすることにより、子宮の大きさや堅さなどがわかる。さらに、超音波の検査も加えることで、ガン以外の婦人病の発見につながる。

●子宮頸がん

他のがんとは異なり、子宮頸がんとは特異な進行過程を持ち、早期の段階では細胞の前がん状態(異形成)を呈す。この前がん状態でもパップスメアによって診断が可能。前がん状態の場合やそれよりもわずかに進行した場合でも、病変部を冷凍療法または、切除術などで治療が可能である。更に進行してしまうと急速に全身性の疾患となってリンパや他の臓器に転移し、致命的な病気となる。そうなると外科的な治療だけではなく放射線治療や化学治療も必要となってくる。

●子宮頸がんが発病するまで

子宮頸がんの発生原因のほとんどがヒトパピローマウイルス(HPV)の長期間の感染であると、最近の研究で明らかになっている。子宮頸がんが発病するまでの流れをまとめると、性行為→性行為によるHPV感染→HPVによる細胞の異形成(前がん状態)→子宮頸がんへと進む。HPVには100以上もの種類があり、その全てが病気と関与している訳ではない。大半は感染しても大きな問題を起こす事はない。しかし一部の型は性器イボ(尖圭コンジローマ)

の原因となり、その他の型はハイリスク型HPVと呼ばれ、このハイリスク型が子宮頸がんの原因となる。HPVは性交渉により感染するウイルスであり、性交経験のある女性では誰でも感染する可能性がある。HPVに感染すると多くの場合は免疫力によってHPVが体内から排除されると考えられる。HPV感染の大半は自然消滅するが、約10%の人では感染が長期化(持続感染化)、HPVが持続感染化するとその一部で子宮頸部の細胞に異常(異形成)を生じ、さらに平均で10年以上の歳月の後、ごく一部が異形成から子宮頸がんに進行するとみられている。子宮頸がんの発病のリスクとなる原因は幾つかあり、年齢、人種などはコントロールできないが、その他の原因は予防できる。

●子宮頸がんの原因、予防

HPVは性感染症の一つなので、感染する原因としては避妊ピルの普及により、コンドームを使用しない複数のパートナーとの性交渉、相手がコンドームを使用せずに複数のパートナーと性交渉をしている、他の性病の病歴などが挙げられる。また、喫煙も子宮頸がんのリスクの一つであり、その他には、家族歴、多数の出産歴、避妊薬の長期服用、クラミジア感染症などがある。アメリカでは21歳または性交渉が始まった年から最低3年ごとのパップスメアを勧めているが、大抵の女性は毎年受けるのが通例である。パップスメアに微妙な変化が見られた場合、このウイルスの検査をする施設も多く出てきた。2007年に改正されたCDC(Center for Disease Control and Prevention)による予防接種のスケジュールに、このHPVに対する予防接種が新たに加わった。2010年のCDCによる予防接種のスケジュールでは女兒の11歳か

ら12歳にかけてこの予防接種を始め、その時に受けなかった13歳から26歳の女性にも受けるよう推奨している。現在、アメリカ、オーストラリアのように国によっては男児、男児も受けるように推奨しているところもある。詳しくは、www.cdc.govを参照していただきたい。

③性感染症の検査

性感染症を明らかにするために毎年婦人科検診はとても意味がある。致命的で有名なものとしては、HIV感染がまず挙げられるが、それ以外にも感染しやすく多くのダメージを起こすものとして知られているものにB型肝炎がある。B型肝炎は血液感染のほか、性交渉によっても感染し、HIVよりも一万倍感染しやすいと言われている。また、クラミジアはウイルスに似た細菌で、アメリカでは一番多い性感染症である。クラミジア感染は尿道炎、子宮頸炎、骨盤内炎症性疾患を起こし、子宮外妊娠や不妊、慢性の骨盤痛の原因になる可能性がある。これらの他にも定期的な婦人科検診は淋病、ヘルペス、ガーデネラ膣炎などの早期発見にも役立つ。

日本ではパップスメアや性感染症の検査の重要性が、知識の不足などによって一般化されていないのに加え、これらの検査が保険適応ではないため、希望した場合に限り検査が行われている。性行為に対する考え方も多様化し、複数のパートナーを持つこともありえる現実を考えると、性教育の見直しを問うとともに、1年に1度の婦人科検診は必須と言える。

マンハッタン・ウェルネス・メディカル
中釜知則医師

